

月刊

地域保健

3
2012

●特集

わがまちの子育て支援事業

●フロントランナー

田中かおるさん 《妙高市福祉介護課 主査保健師》

●ピープル

川口有美子さん 《NPO法人 ALS/MND サポートセンター さくら会 理事》



田中かおるさん

● 妙高市福祉介護課 主査保健師



保健師はいくつになってもアンテナを研ぎ澄ますことが大切だと思います。

人と人をつなぐ「媒体」として

新潟県妙高市

吹雪の中、車は雪しぶきを上げて走った。道の両側には背丈より高い雪の壁が続く。消雪パイプから噴出した水が路面の雪を溶かしているが、それだけでは降りしきる雪に対処できず、



市。妙高といえばきれいな雪山とスキーのイメージだが、あいにくの天候で雪山の景色は見ることができない。

今日は温泉施設・友楽里館^{ゆうらくらいかん}で介護予防事業「わくわく温泉教室」が開かれ

現地の人にとって、雪はスキーなど
の観光資源である半面、脅威でもある
ことに今更ながら気づいた。「業者さ
んに雪下ろしを頼むことはできないん
ですか」と聞いた。すると、このとこ
ろの大雪で既に予約はいっぱいになつ
ているという。

豪雪地帯の冬は東京の人間には想像もつかない厳しさだ。

温泉を使った介護予防

「わくわく温泉教室」は妙高市が
2010(平成22)年度から始めた介

田中かおるさんの運転で、車はそこに向かっていった。

沿道の民家の屋根には50センチ以上の積雪があるようだつた。

「雪が降り積もると死にたくなるって
言う、お年寄りもいるんですね」

田中さんの言葉に思わずハッととなつた。この大雪では高齢者に雪下ろしは

無理だろう。分厚い雪の層に窓ガラスを覆われ、戸も開けられず、屋根にのしかかる雪の重みを案じながら暮らす。心細さはいかばかりか。日照時間の短



すべてが雪に埋もれ、車の運転も慎重を要する。交差点を見つけるのも大変



特集

わがまちの 子育て支援事業

- P18 三春町の5歳児発達相談事業
【福島県三春町】
◎文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）
- P26 三条市の子ども・若者総合サポートシステム
【新潟県三条市】
◎三条市教育委員会 樋口律子
- P33 “子育ち支援”による生涯を通じた健康づくりを目指して
【新潟県上越市】
◎上越市健康福祉部 長嶺雅美
- P40 育児不安を解消し虐待を予防する「親と子の相談室」事業
【東京都新宿区】
◎新宿区西新宿保健センター 神楽岡 澄
- P52 療育資源の少ない小さな自治体での発達支援
【和歌山県御坊市】
◎御坊市市民福祉部 南 ふみ
- P60 光市の「おっぱい育児」推進
【山口県光市】
◎光市福祉保健部 田中満喜

かつては新人保健師が実地でトレーニングし、力量をつけるのに最適とされた母子保健。近年は発達障害や虐待、コミュニケーションに難のある母親など、支援が難しいケースが増えている。そうした中でも創意工夫を凝らした取り組みが全国的に見られるようになった。今月の特集では、その地域ならではのユニークな取り組み事例を紹介する。



看護・助産の経験も豊富なひよこさんは子育て真っ最中の2児の母

向学心に燃え大学、大学院も視野に

坂井幸代さん

●我孫子市健康福祉部健康づくり支援課



▲苦手だったパソコン操作も今はしっかりこなせるようになった



文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

今回訪ねたのは千葉県の北西部に位置する我孫子市。40年ほど前から東京のベッドタウンとして発展を続けてきた町である。お隣の柏市のように巨大な商業施設はあまりないものの、駅周辺は住宅がどんどん増え、子育てのしやすい町としても知られている。

我孫子は僕にとって特別な場所だ。実は9歳から29歳までここに暮らし、今も親や兄弟が住んでいる。つまり、すでに故郷のような場所なのだ。

看護職を意識したのは高2のときだ。「祖父が脳梗塞で入院しました。それで病院に行く機会が増え、看護師さんの優しさとキビキビした動きがとても格好良く思えたのです」

ここで一気に助産師への興味がわいた坂井さん。人に惚れ込み、仕事に惚れ込み、看護学校卒業後は助産師学校に入るべく受験をしてみたが、残念ながら不合格。浪人するわけにもいかず、そのまま学校併設の大学附属病院に就職した。

看護師のキビキビした動きに憧れる

さて、そんななじみの場所でお会いしたのは、坂井幸代さん。年齢は38歳、二児の母——と、今までご紹介してきた人たちとは異色ながら、保健師としてのキャリアはまだ3年。これまでどのような道を辿ってきたのか、じっくりお話を聞いてみた。

生まれは茨城県の猿島町（現・坂東

看護師を目指すことに両親も賛成してくれたので、県内にある東京医科大学霞ヶ浦看護専門学校に入学。慣れない寮住まい。しかも先輩との二人部屋の生活を送りながら、勉強を始めた。

「勉強は高校のときより楽しかったです。実習では、小児科で担当した患者のお母さんが看護師で、母、そして看護師としての素直な心の内を交換日記

助産師の資格も取得

看護師としてスタートを切った坂井さん。配属は消化器外科になつた。

「外科に興味がありましたし、先輩たちの雰囲気も一番いいなと思っていたからです。助産師を目指していたけど、産科に入ろうと思わなかつたのは不思